

秩父大ドツケの福寿草自生地へ

KT

秩父大ドツケの『福寿草自生地』へ地図とにらめっこをしながら、同行者に助けられながら行って来た。

2年前の秩父の大雪のさらに前に観に来ていた。その2年前の雪のためか、途中の作業小屋や鹿避けネットなど崩壊している。斜面も崩れてい



る、崩れた斜面を慎重に横切ると、そこには前には見つけられなかった叡山堇(ハキキョウジツコ)が咲いている。沢には雪も残り多くの倒木が行く手を塞いでいる。

残雪も少なくなつて来ると、芽を出したばかりの紫の植物が目に入る。『福寿草!』と思



つたが福寿草より猛毒の走野老(シメツバヒ)であり、福寿草を私たちが人間から遠ざけている。

福寿草は源流部に以前と同じく、強かにひっそりと、青々とした葉の先に黄色い花をつけ群生していた。想像してい

たより人間による影響も雪による被害も少なかったようである。木々はまだ芽吹い

てはいないが曇り空で光が射さないためか、時期的に早かったのか、開ききった花は少ない。

ここの福寿草はどうやって世代交代し、増えるのだろうか?自家受粉なのか?寒いのか花粉を運ぶ昆虫は見当たらない。根が延びてそこから新しい芽が出てくるのだろうか?そうだとしたら訪れることにより地面は踏み固まり、根は伸びず増えないことになつてしまう。実際、人間の踏



み跡であろう、小さなヘリポートのように裸地化した場所には福寿草もその他の草木もない。昆虫の媒介による受粉としても、辺境の山中の隔離

された場所なので、この個体は遺伝子的にも差異が少なく同じような性質で、種々雑多な『多様性』でなく『単一性』に近いと判断も出来る。

単一性であればウイルスなどが持ち込まれれば一株も残らず全滅する恐れもある。山梨県西桂町の倉見山山麓の個人が育てた熊谷草(こまぐさ)は

ハイカーの持ち込んだウイルスが原因で、5万株から5千株に(数値はうる覚え)大激減している。今は靴底を洗浄してから入園させている。

現代において、自然破壊は地震・火山噴火や大雪大雨等の自然災害より、宅地化等の土地開発や排ガス・原発放射能等私たちが人間活動による影響の

方が、はるかに大きいと確信している。その大雪大雨など温暖化の原因も元をたどれば人間の生活や経済活動に起因する。そして、生産した食物の一部は食糧難の地域があるにも関わらずむごたらしいことに捨てられてもいる。生物にとつて最も嫌われる存在は人間であろう。

帰り道の笹(スズタケ?と言うらしい)は前回来た時は、葉はなく茎のみで枯れていたが、今回は茎さえもなくなっている。しかし小さな若い笹が散見出来る。笹は花が咲くと枯れると聞いたが世代交代の時期なのだろうか? シードバンク(Seed bank)と言われ、古代縄文時代の蓮の種子が芽生えたように、以前あった他の草木の種子が長い間の休眠から目覚めて生えて来るのだ

ろうか? どう遷移していくのであろうか? 気になる。

ひっそり佇む二十三夜塔は秩父の自然を見守っている。



【山行日】H28年3月23日
【メンバー】M浦、K原塚、

T脇、KT